

体育・文化活動

体育・文化活動

明治・大正期における体育・文化面での具体的な活動については定かではないが、『ニチボー75年史』によれば、ニチボーのスポーツは昭和3年に結成された日紡体育連盟が組織的活動の出発点であり、また工場文化活動は戦後の昭和24年より全社的に展開されている旨が記されており、その他『大日本紡績50年記要』や『風雪に耐えて(宇治工場創立50周年記念誌)』また『ねんりん(岡崎工場50周年記念誌)』さらには日レ社報『青雲(創立35周年記念特別号)』にも、戦前、戦後の事業場の体育・文化活動について、しばしば触れている。

ニチボー、日レ両社とも事業場ごとの体育・文化活動の歴史は古く、数多くの栄光に輝いており、その伝統はユニチカに引き継がれている。

ニチボー

[体育連盟の復活]

戦後、ニチボーの社内スポーツの中でとくに対外的に著名なものに、バレーボール、バスケットボール、ソフトボールあるいは軟式庭球などが挙げられる。これらは社内体育活動の頂点に立つものではあったが、いずれも長い歴史と伝統によって育まれた総合活動の中から生まれ出たものであると言える。

社内のスポーツが組織化され総合的な活動となったのは、前述したように昭和3年の「大日本紡績体育連盟」からである。体育連盟組織によって陸上競技が各工場において盛んとなり、翌4年秋には大阪府下千里山において社内大会が開かれている。当時の役員・社員の中には日本記録保持者もいて、この人達の指導の下に陸上競技各種目にわたって対外代表選手が生まれ、数多くの好記録を残している。7年秋には第1回の体育連盟本部大会が開催され、各工場から集まった代表選手によって各種目にわたる陸上競技の決勝大会が盛大に行われた。この時大会の審判を引き受けたのが京都帝国大学の陸上部員であり、その主審をつとめたのが後に当社社員となった白石磷であった。

この頃野球部も充実しており、部員の中には全国中等学校野球大会選手として甲子園出場経験者も少なくなかった。8年の都市対抗に大垣工場チームは岐阜県を代表し、東海大会で川崎コロムビアと覇を争って1-0で惜敗している。また11年には津守チームが大阪実業団の覇権を獲得するなど、ニチボーの体育活動が隆盛を極めたのは7年から大東亜戦争前の15年にかけてであった。

戦時下の中断を経て、各種スポーツ大会が再開されたのは昭和23年の体育連盟の復活以後である。

軟式野球、軟式庭球、硬式卓球、ソフトボール、バレーボールの5種目を中心に、地区別大会、全国大会が年中行事として継続実施された。このほか20年代は陸上競技、26～35年の間には駅伝の全社大会も実施された。

戦後の体育活動で特筆すべきものにキャンプリダー講習会がある。YMCAの松田稔講師によって26年から開始された男女指導者養成は毎年関西地区あるいは中部地区で開催され、そのリーダーを中心とする各工場のキャンピング活動はその後20数年にわたる伝統行事として定着し、規律・友愛・責任の精神育成に大きく貢献した。

[バレーボール]

ニチボーにおけるバレーボールは大正12年に職場リフレッシュ・スポーツとして導入されたが、その水準向上には長い年月を要している。当社女子チームが対外的に名を挙げたのは、尼崎工場チームが昭和12年から3年間にわたって全日本女子総合選手権大会で連続優勝した時からである。とくに14年秋の決勝戦は昭和天皇ご出席の下での天覧試合であった。後年貝塚工場バレーボールチームの監督となった大松博文はその頃関西学院選手として尼崎工場チームのコーチに当たっていた。

戦後第1回全日本実業団バレーボール大会が兵庫県西宮市において開催されたのは23年であるが、この時尼崎工場チームが優勝に輝いている。次いで足利工場に編成されたチームが頭角を現し、26年から3年間全日本実業団において連続優勝し、28年には全日本女子総合においても優勝して皇后杯を手中にしている。

バレーボール活動を貝塚工場に統合し、新たなチームの編成をしたのは29年3月である。監督には前掲の大松博文が当り、新機軸によるハードトレーニングによって次々とタイトルを獲得し、33年には日本女子総合・全日本実業団・都市対抗・国体の4大タイトルを独占し、わが国の女子バレーボール界における初の完全優勝を達成した。

35年10月、ブラジルで開催された第3回世界選手権大会に貝塚工場の選手を主力とする日本チームが出場した。6人制バレーボールの世界的試合に日本チームが参加したのはこれが最初であったが、この時惜しくもソ連に敗れて第2位となったものの、実力はすでに世界的水準に達していた。次の37年10月モスクワにおいて開幕した第4回世界選手権大会では、セットカウント3-1をもってソ連を撃破し、ついに世界一の栄光に輝き、恐るべき“東洋の魔女”として報道された。

2年後の東京オリンピックにはバレーボールが正式種目に加えられることになり、オリンピックという檜舞台でソ連と覇を競うことになった。

当時の日本チームのメンバーのうち当社社員は次のとおりであった。

監督 大松博文

選手 河西昌枝(コーチ兼主将)、宮本恵美子、谷田絹子、半田百合子、松村好子、磯辺サダ、藤本佑子、松村勝美、佐々木節子、篠崎洋子

優勝をめざしたトレーニングは、大松が創案した画期的な“回転レシーブ”を始め、人間の体力の限界への挑戦ともいえるべきハードなものであったが、河西以下チームの各メンバーはよくこれに耐え、39年10月23日駒沢屋内球技場において堂々3-0をもってソ連を破り、国民は挙げてこの優勝に熱狂的な拍手を贈ったのである。

大松の著書で世界選手権制覇までの苦闘の記録である『おれについてこい』とオリンピック後に書かれた『なせばなる』はベストセラーとなり、世の指導書となった。また37年10月当社によって製作された映画『ハードトレーニング』は文部省推奨となり、翌



東京オリンピックで金メダルに輝いた日本チーム

38年11月若い女流監督渋谷昶子とそのスタッフが1年間にわたる密着撮影ののち完成した『挑戦』は、39年5月の第17回カンヌ映画祭で短編の部の最優秀グランプリを授与されている。さらに翌40年2月には当社企画・毎日新聞社製作による記録映画『栄光への道』が完成している。

大松はオリンピック終了後の39年末、体力の限界を理由に監督を辞し、40年1月初め四天王寺学園バレーボールチーム監督であった小島孝治と交代した。ニチボー貝塚はその後も、徹底した守りと粘り強い精神力を特色としたチームカラーを武器に常勝を続け、41年8月に公式戦258連勝を記録している。

[バスケットボール]

女子バスケットボールチームが初めて結成されたのは昭和24年、場所は本店内である。当初女子の同好クラブとして出発したチームはめきめきと頭角を現し、1年を経ずして全日本実業団で3位、大阪総合、西日本大会では優勝して対外的に名が知られるようになった。その後平野工場に合流して総合チームを結成したのが29年であり、バレーボールが貝塚で統一チームを結成したのと時を同じくしている。

31年に尾崎正敏が監督として招かれてから、その指導のもと次第に強力なチームとなり、日紡平野として33年1月には第24回全日本総合選手権に初優勝した。皇后杯が箱根を越えたのは20年ぶりという快挙であった。

34年1月からは国内試合で無敵ぶりを発揮し、全日本総合選手権、全日本実業団選手権等で連勝を重ね、43年1月までの間に国内170連勝を記録した。

海外では、40年4月の韓国ソウルにおける第1回アジア女子バスケットボール選手権大会、42年4月にチェコスロバキアで開催された第5回世界女子バスケットボール選手権大会に日本チームの主力として出場し、それぞれ2位と5位の成績を収めている。42年10月朴正熙杯争奪東南アジア女子バスケットボール選手権大会に単独チームとして出場、この時は優勝は逸したが、44年3月の第6回同大会において優勝し朴大統領杯を手中にした。またこの間、41年3月には日中親善をかねて中国へ遠征、北京・天津・南京・上海・広州を転戦するなど、バレーボールに劣らぬ活躍をみせている。

下園洋子、大川節子、堀一江、林早苗、柳登美子、前田洋子その他の名選手が輩出した時期であった。

44年1月には5年連続9度目の皇后杯を手にし、ニチボー平野としての最終を飾った。平野工場の閉鎖に伴い、44年4月チームは山崎工場へ移動し、以降チーム名をニチボー山崎と変更した。

体育・文化活動

41年2月にスポーツ映画『闘魂』が完成した。これは当社のバレー・バスケット両チームの精神的、肉体的にハードなトレーニングを科学的側面から捉えたもので、基礎体力づくりから高度の技術に到達するまでの厳しい過程が両チームの練習を通じて紹介されている。

[ソフトボール・軟式庭球]

バレー、バスケットと比べて地味な存在であるが、ソフトボールの活躍も見逃せない。初期の20年代は足利工場チームが全国大会で2～3位を占めていたが、29年の全日本選手権で同チームが優勝したことが引き金となって、各工場チームもレベルアップした。

その後垂井工場チームが頭角を現し、35年第15回熊本国体で優勝したあと、37年第17回岡山国体、38年第18回山口国体と連続優勝し、さらに42年の第22回埼玉国体で4度目の優勝を果たしている。

また、39年の第16回全日本一般選手権において決勝戦では初のパーフェクトゲームをなしとげて優勝している。

このほか、常盤工場の軟式庭球チームは、30年の全駄本女子総合選手権に片山・山崎組が優勝したあと、33年、34年と連続して全国インドア軟式庭球においても優勝し、全日本実業団では32年、33年および38年の3回にわたって優勝組が現れるなど、輝かしい成績を残している。

[文化活動と職場皆唱]

終戦直後の荒廃の中で紡績産業はいち早く日本経済の再建の担い手となったのであるが、その従業員の80%は女子であり、しかもその95%は遠く親元を離れた寄宿生活着であった。工場においては何よりもまず従業員の安定と定着が求められたが、特に意を用いたのは職場や寮生活に明るさとうるおいを与えることであった。

昭和21年春、東京において宮原誠一(東京大学教授)、羽仁説子(自由学園長)、柳宗悦(日本民芸館長)ら各界一流の文化人による企画で「民衆文化同志会」が発足し、森口清が運営マネージャーに就任した。敗戦とともに心の支えを失った勤労者に新しい文化の息吹を与えるため、自ら生産現場において実践しようという同志の集まりであり、当社もその主旨に賛同し、労働組合と協議の上、従業員の文化活動を積極的に進めていくことになった。

23年には千田是也、遠藤慎吾らが講師となって演劇指導者講習会が開かれ、貝塚、垂井、平野の各工場では演劇コンクールが開催された。翌24年には社内で演劇脚本の募集が行われて、その入選作品が発表され、また演劇鑑賞面では「山本安英とぶどうの会」や真山美保と新制作座による公演、民衆劇場(現・関西芸術座)による公演などが巡回上演された。

同じく23年から開始された音楽の巡回指導は、その後30年間におよび当社の文化活動の根幹となるまでに成長した。

工場音楽の指導者は声楽家の村尾護郎、鷺崎良三、高木清の3人のほか、畑中良輔、大賀典雄(現・ソニ

体育・文化活動

一社長)らが指導研究会と演奏班のリーダーとして情熱を傾けた。歌唱指導は職場コーラスへと高められていき、24年からは工場文化祭へと発展し、工場ごとに毎年開催される文化祭は工場長はじめ全員参加による合唱祭として年とともにその水準は向上していった。25年1月からは一流の演奏家による音楽鑑賞会が班を編成して工場を巡回し、日頃従業員にとって接触の少ない声楽・ピアノ・バイオリン・チェロ等の演奏を鑑賞した。この活動に参加した音楽家は多数にのぼり、現在なお第一線芸術家として活躍中の著名人が数多く見受けられる。

とくに、村尾、鷺崎両氏の熱情にあふれた指導により、31年には関西、中京の地区別合同音楽祭へと発展して、参加工場は互いにその水準を競い、音楽活動は職場皆唱にまで高められながら社内に定着していった。

各種産業事業団の音楽実行委員と朝日新聞社の共催により32年から始まった日本産業音楽祭に当社は毎年出場し、毎回賞を獲得している。大阪フェスティバルホールで行われる関西大会には、本店および各工場からの参加者が時には400人近い大合唱を披露し、この祭典のシンボルとして人々に感銘を与えた。ことに41年の大阪大会は発足10周年に当たり、その中でニチボー300人(本店と6力工場)の大合唱は「産業音楽大賞」「優秀賞」「職場音楽賞」に輝き、講評の諸先生も感動で声をつまらせるほどであった。

事業場におけるその他の文化活動は同好会によって運営され、絵画、写真、謡曲、俳句など多彩であった。ことに俳句は戦前から同好の士が多く、戦後は24年9月に発刊された『社報』第1号から日紡俳壇が設けられ、ホトトギス同人でもある藤岡玉骨(元常務)、東野悠象(75年史執筆者)の指導もあって、多数の投稿者で賑わった。

日本レイヨン

[体育・文化活動の再開と活性化]

戦後、世の中がようやく落ち着いて体育・文化活動に必要な用具類が出回るようになり、それを入手できる環境が整ったことで舞台装置は用意された。宇治工場混声合唱団が結成されたのは昭和28年であるが、運動関係の各部も初動を開始し、30年代に入るといっせいに活動期に突入した。同時に、特定のクラブ以外的一般レクリエーションと称された従業員全般のこの種の活動も漸次活発となり、余暇の善用として大いに奨励された。

30年代前半期、宇治工場のクラブ活動は、陸上部を始め男女バスケットボール部・卓球部・バレーボール部などが、すでに京都地方の大会を制するレベルに達し、近畿(関西)大会から全国大会へと駒を進めつつあった。その後女子ソフトボール部・軟式庭球部・硬式野球部・ラグビー部・水泳部・柔道部なども結成されて、1段と活気を帯びてきた。

中でもいち早く頭角を現したのは女子バスケットボール部と陸上部で、これらは35年頃から近畿大会でトップを争うとともに全国大会でも入賞するレベルに達した。37年の岡山国体には女子バスケット・

陸上・卓球の各部から計22名が京都府代表として出場して活躍した。

岡崎工場においても、軟式野球部・卓球部などは早くから県大会で常にトップを争うレベルに達していたが、その後男子バスケットボール部・陸上部・庭球部なども結成されて活躍した。

スポーツ施設に恵まれない本社でも、老舗の軟式庭球部・軟式野球部のほかに、新たに漕艇部・ラグビー部などが結成されて活動を展開していった。

健康保険組合主催の支部対抗軟式野球大会が35年から始められ、37年からはバスケットボールと卓球に種目が広げられたことが活性化に拍車をかけた。健保支部はほぼ事業場単位で設けられていたから、支部対抗＝事業場対抗となり大会は毎年大きな盛り上がりを示した。

これら事業場を代表するクラブ活動のほかに、一般レクリエーションとしての任意的なスポーツ活動も活発化し、事業場内での各種大会も積極的に実施されていった。宇治工場の軟式野球チームは常に20～30の多きを数え、宇治地方大会ではこれら当社チームだけで大きなウエートを占め、互いに覇を競った。

文化活動でもコーラス部を中心に各事業場で種々の活動が展開されたが、中でも宇治の混声合唱団は32年の第1回関西産業音楽祭で優秀賞を受賞し、以後毎年出場して常に優秀な成績を収めた。コーラスはこの宇治を中心として、本社、綜研、東京などの合唱団が集まって毎年社内音楽会が開催されるようになった。



河津選手の跳躍

[開花期へ]

急速に盛り上げてきたスポーツ活動は、30年代半ばに至って一層成果が現れるようになり、特に宇治工場では各部にわたって第一線級選手の採用が行われたことによって、レベルが一段と上昇して開花期を迎えた。

陸上部は、34年に来日したドイツチームとの日独対抗競技大会で当社の魚留澄夫が日本代表選手として活躍した頃から、躍進のきっかけをつかんだ。36年に関西実業団選手権大会で女子が初優勝し、続く37年には男女総合で初優勝を果たした後は同大会で常勝の座についた。

そしてさらに一段と飛躍する契機は、東京オリンピック大会の日本代表として河津光朗と菅田徹の2選手を送り出したことから訪れた。オリンピックでは河津は走幅跳びに、菅田は1600メートルリレーの第一走者として出場した。結果は残念ながら予選通過ならず涙を吞んだが、。オリンピック選手を生んだことが大きな誇りと刺激となって、部全体のレベルも翌年から一挙に上昇した。

女子バスケット部はすでに35年の全日本総合選手権大会で4位に入るとともに、近畿総合選手権大会で初優勝して自信をつけていたが、38年10月には初の国際試合のチャンスが訪れた。遠征してきた韓国銀行チームを迎え撃って接戦の末これを降したことによってさらに力をつけた。そして39年1月の全日本総合選手権大会で3位に入賞したことから、初の海外遠征の機会をつかんだ。同年2月韓国ソウルで開催された東南アジア大会に日本代表として出場して準優勝に輝いた。さらに翌40年1月の全日本総合

体育・文化活動

でも前年に続いて第3位となったことによって、女子バスケット界で指折りのチームの仲間入りを果たすまでに成長した。

これらに次いで女子卓球部の台頭がめざましく、38年に全日本実業団選手権大会でベスト8入りを果たした後、6月の全日本軟式卓球大会で浜田・吉田組が見事に優勝して日本一の栄冠を獲得した。続く翌年の同大会でも単複の双方で3位の座を確保し、この年全日本実業団でも硬式女子の部で3位に入賞して女子卓球界の一角に名を成すようになった。

女子水泳部もめきめきと力をつけて39年の関西実業団選手権大会で優勝して、その後の飛躍への足がかりをつかんだ。

このほか、男女バレー部、女子ソフトボール部なども全国大会に出場して活躍した。

ラグビー部は23年に発足した本社チームと翌34年創部の宇治チームが互いによきライバルとして競いつつ力をつけてきたが、39年に両チームが合同して宇治を本拠とする単一チームとなり、後の関西社会人Aリーグ入りの基礎が築かれた。

その他岡崎工場の卓球や陸上、綜研の男子バレーボールや軟式野球なども全国レベルに達して活躍した。

文化部の関係では、各事業場でコーラス部その他の活動が次第に活発となっていった。

中でも38年夏に結成された宇治工場ブラスバンド部は、社内行事はもとより地域社会の各種行事にも賛助出演して好評を博し、産業音楽祭にも出演して合唱団と合同演奏するなど異彩を放った。

[全盛期へ]

スポーツ活動はその後も一層活発に展開されるようになり、不況期にあっても成果は現れて社員モラルの高揚に貢献した。

宇治工場陸上部は、40年の全日本実業団選手権大会の男子団体で2位に入り、男女総合では一躍3位に浮上した。菅田は同大会で4個の金メダルを獲得したが、他の大会でも200メートル競走で日本新記録を樹立した。以後も男女にわたり有望選手が年々補強されたことによって、同大会では女子も団体入賞するようになって、総合では以後3年連続3位をキープした。

44年にはメキメキ頭角を現した河野信子が400メートル競走で日本新記録を樹立、その後数年間にわたり女王の座につくスタートを切った。

女子バスケットボール部もさらに充実して躍進期を迎えた。国体には常時出場して38～41年には4連続準優勝の後、42年から3連覇を達成した。全日本総合では41～45年は常に4位内にとどまり、また42年からスタートした実業団上位8チームによる日本リーグでも、以後数年にかけて2～3位に入っていた。

40年には前年に続き韓国で開催された東南アジア大会に出場し、また42年の世界選手権大会、43年のアジア大会には江守良子、角谷郁子、門脇裕子らが日本チームに参加して活躍した。

女子バスケットボール部は小森正巳(監督)、栗山永嗣(コーチ、のち監督)両名の指導を得て進歩し、全体

体育・文化活動

的に小柄ながら小気味よいプレーは定評があった。結果的にみて、このチームの全盛期は40年代前半であったといえよう。

水泳部は有力選手の補強によって頭角を現し、40年、42年の全国勤労者大会で一躍優勝の栄に輝き、他の年も2～3位に入賞するなど強豪の一角を占めた。その後も日本実業団大会、国体等でも健闘して上位入賞を果たしていたが、この部の最盛期も女子バスケット部と同様、この40年代前半であったとみることができる。

ラグビー部は強烈なタックルを身上としたファイト溢れるプレーでファンを沸かせ、40年に関西社会入Bリーグで準優勝して弾みをつけ、以後も連覇するなど、40年代前半はこの部にとって陸上部同様助走期間に相当していたといえよう。

陸上部・ラグビー部の躍進の基盤は、41年5月に完成した「新グラウンド」によって築かれたとみることができる。現在は宇治プラスチック工場敷地が変わっているが、運動部専用提供されたことにより選手達は存分な練習が可能となった。

卓球部も引き続きチーム力を維持して活躍した。団体での上位入賞はなかったが、個人戦で全日本軟式大会・国体などにおいて毎年上位入賞者が出て、その後46年には全日本軟式大会の女子ダブルスで安部・溝田組が王座に就いた。

この時期に台頭したクラブに、綜研を主体に一部宇治工場選手を補強して編成された軟式野球部がある。軟式と準硬式の両方をこなして、常陸宮杯全日本準硬式大会には常連として出場し、42年には準優勝の栄に輝いた。軟式では44年の全日本工場対抗大会で優勝して名を挙げ、この年「スポーツニッポン賞」を受賞した。

このほか、宇治工場と綜研の混成クラブとしての軟式庭球部、岡崎工場のレスリング部、綜研のボウリング部の活躍などが目立った。

この頃企業活動そのものはやや低迷した時期もあったが、以上のように当社のスポーツ活動は全盛時代を迎えようとしていた。

一方、文化関係クラブの活躍も盛んであった。社内音楽会は年々盛会となって出演団体はコーラス部のほかに、ブラスバンドを始め、ストリングスバンド、ロックバンドなども加わって多彩となり、会場は満員の盛況となって沸いた。

宇治工場ブラスバンド部は、41年から工場講堂を会場として定期演奏会をスタートさせ、この年関西吹奏楽コンクールにも出場して3位に入賞し弾みをつけた。またこの年宇治工場では若い女性10数名に

よって「バトン部」が結成され、ブラスバンド部とのセットで工場行事はもとより、各種地域行事にも出場して華麗な演技を繰りひろげ喝采を浴びた。

ユニチカ

[ユニチカ発足から]

昭和44年10月のユニチカ発足以降は、社員の早期融和と士気向上のために、文化・体育面にはカを入れ、合併以前から開催されてきた東西両地区に分かれての球技大会、地区音楽祭、そして産業音楽祭への参加等が引き続き行われた。

キャンプリーダー講習会は、46年からレクリエーションリーダー講習会と名称を変え、50年から55年までの間を除いて継続され、59年からはリーダー講習会の名称で若年層リーダーの育成に貢献している。

球技大会は一時期種目別大会としたが、後に全社球技大会とした。地区音楽祭は48年から全社合同で開催するようになり、51年にコーラスフェスティバルと名称を改めた。

各事業場のクラブや同好会の活動も非常に活発に行われてきた。文化サークルでは茶道、華道、吹奏楽、コーラス、囲碁、将棋、カメラなど。スポーツでは野球、卓球、テニス、バレーボール、バスケットボール、スキーその他幅広く行われている。

従業員の健康管理については、従来から体力テストの実施などを行ってきたが、オイルショックをくぐりぬけ、高齢化社会の本格的な到来と定年延長時代を迎えて全社的な健康増進対策に取り組んだ。55年に健康増進事務局を設置し、毎年の全員対象の体力測定に基づいて、健康状況の把握や産業医と各事業場リーダーによる運動メニューや運動習慣習得の指導などを実施し、数値のコンピュータ記録を利用して総合的な対応を行っている。

次にユニチカの社名で出場している代表的なスポーツについて触れよう。

[バレーボール]

バレーボール部は、ユニチカ誕生の44年の日本リーグ第3回大会を初優勝で飾り、以後も3年連続して優勝している。当時の主力選手松村勝美が第3回と第5回で、古川牧子が第4回でそれぞれ最優秀選手賞に輝いている。

53年、小島が総監督、吉田国晃が監督となった後、当社は日本リーグにおいて54年、55年と連続優勝し、56年には都市対抗でも優勝している。横山樹理を始め水原理枝子、小川かず子、広瀬美代子等の名選手が活躍し、一時代を画した頃である。

58年から62年までは新旧の交代期に当り低迷したが、平成元年に至り日本リーグでは日立とプレーオフの末に準優勝、黒鷲旗全日本選手権大会では優勝と、再び伝統の力を発揮している。

[バスケットボール]

平野から山崎へ移った女子バスケットボールチームは、45年1月の全日本選手権大会で6連勝を飾り、通算10度目の皇后杯を手中にした。日本リーグでは44年から48年まで5連勝し、その後52年にも優勝している。



日本チームの活躍(モンテリオールオリンピック)

また、国内のみならず海外でも全日本チームの要となってめざましい活躍をした。42年世界女子選手権5位のあと、44年東南アジア選手権優勝、45年アジア女子選手権優勝と、いずれも立派な成果を残している。

とくに50年のコロンビアでの世界女子選手権では、尾崎を全日本チームの監督として、脇田代喜美、山本幸代、宮本輝子、福井美恵子などユニチカ中心のメンバーでソ連に次いで準優勝し、翌年のモンテリオールオリンピックの出場権を得た。モンテリオールオリンピックは日本が初めて女子バスケットボールに参加した大会であった。ユニチカを中心とした日本チームは結果としては5位に終わったものの、世界に伍して堂々と戦った技術と精神力は高く評価された。

44年から51年までは山崎チームと宇治チームが並存していた。宇治チームは31年に創部、青雲館で練習に励み、42年から国体で3連勝するなど立派な成績を残している。日本リーグでは第3回(44年)と第7回(48年)の2度にわたって、1位山崎、2位宇治と並んで、バスケットボール界を沸かした。宇治チームは51年に解散した。

[ソフトボール]



垂井工場女子ソフトボール部の勇姿(平成元年)

垂井工場女子ソフトボール部が頭角を現したのは35年の国体初優勝からであり、以後もめざましい活躍ぶりを示した。

ユニチカ発足後は、44年以降63年までの間に、日本リーグ2回、全日本一般女子選手権3回、全日本実業団選手権6回優勝の実績に輝き、昭和53年にはこれら全タイトルを手中に収め、三冠王チームとなって日本スポーツ賞を受賞している。

[陸上競技]



力走・菅田選手(右端)



力走・河野選手(右端)

宇治工場に本拠を置く陸上部は、昭和30年以降選手の増強に努め、36年には関西実業団大会で女子総合優勝を果たし、以後20連勝した。同大会の男女総合では37年から16連勝をとげている。

また全日本実業団大会では46、47年と連続して男女総合優勝を飾り、同大会の女子総合では46年からの4連勝を含み計5回の優勝を手中にした。

44年に入部した河野信子(400、800、1500メートル)は23回日本記録を樹立し、とくに48年には年間で11回日本記録を書き換えている。これに刺激されて福井治代、平本節子、前田智子ら日本記録樹立者が相次ぐようになり、これら有力女子選手が揃った40年代後半にはこの部の黄金期を迎えた。

いずれの選手も国内大会のほか、アジア大会、太平洋沿岸五カ国大全等の海外遠征においても、日本代表としてその実力を発揮した。

47年のミュンヘン五輪には3人目のオリンピック選手として、男子走幅跳びの川越孝悦が出場して健闘した。

女子競技は近年長距離化が進んでいるが、初の女子駅伝

である全国都道府県対抗女子駅伝において、柏木千恵美が58年(2位)59年(優勝)に京都チームの主将として活躍したことは、いまもわれわれの記憶に新しい。

[ラグビーフットボール]



ラグビー部の試合風景

ラグビー部は関西社会人ラグビーフットボールBリーグにおいて、42年から6年連続優勝のあと48年に念願のAリーグ入りを果たした。その後毎年強豪を相手に善戦、正月の全国社会人大会でも気を吐いた。

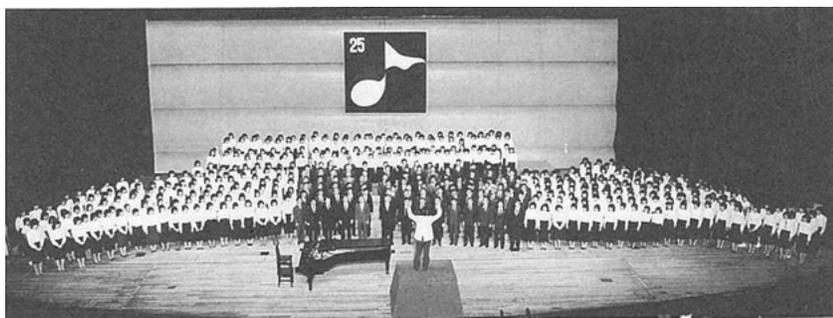
しかし53年に再びBリーグに下がり、以来55年、58年、61年と3回Bリーグ優勝をしたが、Aリーグへの復帰はまだ達成されていない。

[文化活動について]

当社の文化活動の中で特徴のあるものとしては、昭和32年に始まった産業音楽祭関西大会に毎年参加してきた混声合唱団の活動がある。

職場皆唱の音楽活動の広がりについては前にニチボーの章に詳記しているが、当時日レにおいても音楽のクラブ活動は盛んで、産業音楽祭に第1回から毎回100名以上の人員が参加し、ニチボー合唱団とともに、優秀賞、職場音楽賞を受けている。

ユニチカ発足後は、45年秋の第14回大会に総勢543名(男子137名、女子406名)の合唱団と宇治工場吹奏楽団が参加したのが最初で、育ての親である村尾護郎の指導の下に毎年参加し、大合唱団として好評を博した。団員が最も多かったのは57年の622名であった。近年は関西地区事業場の愛好者を中心としたメンバー構成に変化している。



産業音楽祭関西大会におけるユニチカの混声大合唱団